

第 11 期（2019 年度）「ユネスコスクール SDGs アシストプロジェクト」助成金申請書

（西暦）2020 年 1 月 31 日提出

公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟

理事長 鈴木 佑司 殿

ユネスコ スクール名	特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園															
利用予定日、 または期間	2020 年 4 月 10 日(~ 2021 年 2 月 28 日)															
申請プロジェクト名 (30 字以内)	循	環	型	社	会	理	解	の	基	礎	と	な	る	体	験	型
	「	暮	ら	し	と	仕	事	」	学	習	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト
助成申請する 活動の計画概 要 (要約)	<p>※次ページの「①助成申請する活動の具体的内容」について、対象学年、活動の狙い・活動によって期待される成果等がわかるように、100 字以内で要約して下さい。</p> <p>3 年生・4 年生の総合カリキュラム「暮らしと仕事」は、後の ESD/SDGs 学習の土台をなす学びです。牧畜や農と手工芸や土木・建築などの人の根源的な営みを実体験し、里山の循環型社会と結び付けて学びます。</p>															
活動分野	<p>いずれかに○をして下さい (複数回答可)</p> <p>環境、国際理解、平和・人権、世界遺産・地域遺産学習、防災・減災教育、気候変動 その他 (循環型社会理解の基礎となる体験型「暮らしと仕事」学習)</p>															
SDGs の 17 の 目標の中で目 指すゴール	<p>いずれかに○をして下さい (複数回答可)</p> <p>1. 貧困をなくそう 2. 飢餓をゼロに 3. すべての人に健康と福祉を 4. 質の高い教育をみんなに 5. ジェンダー平等を実現しよう 6. 安全な水とトイレを世界に 7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに 8. 働きがいも経済成長も 9. 産業と技術革新の基盤をつくろう 10. 人と国の不平等をなくそう 11. 住み続けられるまちづくりを 12. つくる責任つかう責任 13. 気候変動に具体的な対策を 14. 海の豊かさを守ろう 15. 陸の豊かさも守ろう 16. 平和と公正をすべての人に 17. パートナーシップで目標を達成しよう</p>															
助成金申請金額	<p>いずれかに○をして下さい (10 万円枠) ・ 30 万円枠)</p> <p>申請金額を記入してください 100,000 円 (1 校あたり上限 10 万円/30 万円)</p>															
学校住所	〒226-0016 神奈川県横浜市緑区霧が丘3-1-20															
学校長氏名	代表理事	公 印										学校 TEL	045 (922) 3107			
	小島 俊											学校 FAX	045 (922) 3107			

担当者名 ※必ず2名ご記入 下さい	佐藤雅史	職 名	事務局長	電子 メール	
	横山義宏		担当教員		
ユネスコスクール 加盟時期	2011年1月				

<p>① 助成申請する活動の具体的な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業実践プラン ・ 学校の年間授業の中での位置づけ 等 <p>(継続授業の場合は、これまでの資料を参考資料として添付して下さい。)</p>	<p>(継続授業の場合は、これまでの資料を参考資料として添付して下さい。)</p> <p>✓ 継続授業の資料として以下の資料を添付いたします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ASPUnivNet 東海大学教養学部 2015 年年次報告書より(資料 1) ・ 平成 26 年度ユネスコスクール活動報告書添付資料(資料 2) ・ 『横浜シュタイナー学園 サステイナブルスクール報告書』(資料 3) ・ 『大都市の里山は未来につなぐたからもの』(資料 4) <p>今回は、当学園の特徴のひとつである 3 年生～4 年生前半の総合的体験学習「暮らしと仕事」を再度プロジェクトに選んだ。これまで 12 年の試行を重ねて当学園の教育文化として定着した本プロジェクトでは、暮らしを生み出す多くの道具を用いるが、消耗した道具類を更新して安全かつ安定した取り組みが行えるよう、助成を申請させていただく。また、生活を支える衣類や食器をつくる体験プロジェクトとして、子どもの国雪印ふれあい牧場の体験費およびプロの陶芸職人をお呼びする体験費もあわせて申請する。これらの体験がひとつとなりとなった学びは、記録をとり、学習発表の場をもつ計画を立てている。</p> <p>【授業プラン】</p> <p>(3 年生 1 学期～)</p> <p>メイン授業では、自分たちの生活と関連づけながら、牧畜生活の学びとして、近隣の施設を訪問して羊の毛刈り体験やバターづくりを行う。なお、口蹄疫の影響で、現在、毛刈りは見学のみであるが、実際に刈り取られた毛を持ち帰らせていただいて、その毛を洗淨・脱脂し、きれいにすいて、フェルトをつくり、実生活に使用できる道具(花瓶敷きや手鞠など)をつくる。その他にも手仕事専科では、自分の生活のなかで使う道具(かぎ針ケース、レッグウォーマー、ボールネットなど)を編み物で製作する。それらは持ち帰り、一部は家庭で使ってもらうことで、他者のために自分の働きが役立つという体験となる。</p> <p>さらに、畑づくり、米づくりなど、自らが大地に働きかけることで糧を得る営みを体験的に学んで行く。米づくりでは、地域の里山の谷戸に水田をお借りし、谷戸の貴重な湧水を利用した田づくりの地域文化にも目を向ける。米づくりは、担任が地元の谷戸田を守る会(NPO)の会員となり、手ほどきしていただく。また、横浜新治里山公園の委託管理 NPO にもアドバイスをいただく。畑は、霧が丘校舎の大家さんが自然農を営んでいる畑をお借りし、大家さんのご指導をいただきながら、芋類を中心に育てる。また、校庭にも小さな畑を耕し、野菜や綿花、藍などを育てる。収穫物は、二学期に建てる家の神棚に供え、藍染めに用いる。たくさん収穫した芋類は、他のクラスの家庭にもプレゼント</p>
---	--

し、喜びを分かち合う。

- ✓ 上記の体験のための「ふれあい牧場学校」の体験費を申請します（予算計画〈体験費〉(b)参照）。

(3年生2学期～)

自然の恵みから糧を得る学びに続いて、厳しい自然環境から身を守るための覆いとしての家づくりを行う（家は人間の魂が宿る身体のメタファーでもあり、内面が次第に確立する9歳前後の子どもたちが、身体の健全な成長が内面の支えとなっていることを実感するよすがとなる学びでもある）。子どもたちは、世界各地の異なる自然環境下に多様なスタイルの家があることを学んだ上で、自分たちが暮らす地域の環境からどのような家を建てるかを考える。この地域には大きな里山があり、森林保全活動を行っているボランティア団体の協力を得ながら竹林の竹を切り出し、その竹材で家づくりを行う。

家づくりの授業では、事前に度量衡の学びを行う。人間の身体の長さを使った古代の尺度から標準化された現代の尺度への変遷を体験することで、個別の事象から普遍性をもった規則が生み出されていくプロセスを体験する。

その後、家の材料となる竹を里山から切り出し、必要な長さに切りそろえ、皆で地鎮祭を行った後、家の構造を組み上げていく。組み上げる前には、縄の結び方を学ぶ。

並行して、谷戸の田に稔った米の収穫、畑の芋類の収穫を行う。収穫した稲わらは、一部は家の屋根に葺き、一部は正月飾りに絢う。籾は自分たちの手で脱穀する。同時に、度量衡の学びの延長として重さを学び、収穫物の重さを計ることで、価値の比較が客観的に可能となることを学ぶ。この観点はやがてお金の学び（お店屋さん体験など）、さらに先には経済学の学びへとつながっていく。

並行する手仕事専科では、授業で使う竹の物差しの入れ物や笛袋を手編みしていく。

- ✓ 上記の家づくり授業で使用する竹鉦、ノコギリ（竹用、木材用）、ドライバーセットの購入費を申請します（予算計画〈教材費〉c参照）。

(3年生3学期～)

家が完成した後は、ふたたび生活の学びに戻る。脱穀した米を古民家の釜屋で炊きあげて食し、パン焼きなども体験する。中国語専科の時間にも、旧正月に当たる時期に水餃子を皮からつくり、月餅を食す。

並行する手仕事専科では、毛糸を丸く編み上げて帽子を作る。家がそうであったように、帽子も大切な頭部を包み守るための覆いである。こうして、子どもたちは安心できる温かな家庭から一歩外に踏み出し、自然に働きかけて糧を得るとともに、自然の厳しさから自分を守る自らの覆いをもつことの大切さを学ぶ。地域の豊かな里山の環境を背景に、人類が自然と対話しながら循環型の営みをつくり上げてきたイメージが獲得される。

	<p>(4年生1学期)</p> <p>自然界と関わりながら、身の回りのことを実践的に学び、衣食住に関わる仕事にも意欲的に取り組んできた4年生の1学期は、人々の暮らしに必要な道具類にも目を向けていく。その道を究めて、他者に恩恵をもたらすプロフェッショナルな方々に直接お会いし、その技と仕事に向かう姿勢を目の当たりにすることで、身の回りの物や人に対する感謝の気持ちを育む。</p> <p>2020年度は、前年度に、稲作と収穫、脱穀と釜炊きを通して、大地、水、空気、火の力に人の技と知恵が加わって織りなされた暮らしの体験につながる道具として、茶碗づくりを取り上げる。ご縁のある陶芸家をお願いし、職人の仕事について話をお聞きし、収穫した食べ物を入れられる器をつくる。子どもたちは職人の質の高い仕事に触れ、生活の要求から生まれた工芸が文化にまで高められることも学ぶ。</p> <p>✓ 上記の職人の仕事の学びで陶芸家をお呼びして行う体験費用(材料費、焼成費、材料費・出張費、交通費を含む)を申請します(予算計画〈体験費〉(a)参照)。</p> <p>1年間以上かけて取り組まれた「暮らしと仕事」の学びは、生活の場とつながる地域の学びを端緒とする郷土学へと発展する。里山に源流をもつ川を辿る小旅行では水の処理施設も見学し、水が生活のなかを巡って循環していくことも体験する。さらに、横浜村の吉田新田開拓の学びなど、それまでの学びを踏まえた地域の発展小史を学び、そこから日本地理へと学びは広がっていく。</p> <p>【年間授業のなかの位置づけ】</p> <p>年間を通した総合カリキュラムです。さらに学年をまたいで、学びの内容がつながっています。詳細は、添付資料「横浜シュタイナー学園サステイナブルスクール報告書」を参照してください。</p>
<p>② 対象学年と人数</p>	<p style="text-align: center;"><u>3・4学年</u> <u>30人</u></p>
<p>③ 上記①の活動のねらい(ESDの視点に留意してお書き下さい。)</p>	<p>人間と自然の関係性を、自然からの恩恵と厳しさの両面から学び、自然への働きかけの中で人々の暮らしの営みが発展してきたことを理解する。さらに、地域の里山の環境を活用して、循環型の生活への視点を培う。これは、ESDならびにSDGsの以下のゴールについての包括的な学びとなる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SDGs2「飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する」→ 大地とつながって生産し、それを食す学び ・ SDGs6「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」→ 里山のわずかな湧水を有効利用した谷戸田の稲作を通じた水資源についての学び ・ SDGs12「持続可能な生産消費形態を確保する」→ 里山の循環型の生活を体験し、自ら生産し、消費することで、生産と消費に関わる人の営みに気づき、その責任についても学ぶ

	<ul style="list-style-type: none"> ・ SDGs13「気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる」 → 天候と結びついた農体験から気候の大切さを学ぶ ・ SDGs15「陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する」→ 里山の循環型の生活に学ぶ <p>「暮らしと仕事」の学びは、自分を中心に置いた生活を人類史的な牧畜文化、農耕文化の誕生につなげ、人間の根源的な営みを身体の深いところで掴み取ることが第一の成果として目指されている。そこに地域の教育資源である里山の循環型の暮らしを結び付け、未来に向けて再構築しなくてはならない循環型社会の基本となるイメージに結び付ける。</p> <p>本格的な学びに徐々に足を踏み入れようとする3年生の時期に、自分自身の生活体験を世界事象に結び付ける包括的な学びに取り組むことは、高学年での世界規模の事象の学びにおいても自分自身との関わりを感じ取りながら主体的に学ぶ姿勢へとつながっていく。</p> <p>さらに、ここで取り上げた課題が、成長する子どもたちの心身を発達段階にふさわしくサポートするだろうこともねらいに含まれている。たとえば、家づくり、帽子づくりなど、9歳から10歳にかけて内面の自立の入り口に立つ子どもたちが、その未熟で不安定な内面を支えるための安心感を得ることができる課題を選ぶことで、しっかりと世界に対峙できることに配慮していることは特筆すべき事項である。(詳細は添付資料「サステイナブルスクール報告書」を参照していただきたい。)</p>							
<p>④ 持続可能な社会づくりに必要な価値観や能力・態度の習得など、上記①の活動を通して、期待される変容について記入して下さい。</p>	<p>該当するものに○をして、具体的に記入をして下さい。</p> <table border="1" data-bbox="459 1294 1465 2105"> <tr> <td data-bbox="459 1294 560 1541">学校</td> <td data-bbox="560 1294 1465 1541"> <p>圧倒的な時間数を校外学習に費やす「暮らしと仕事」のカリキュラムが、子どもたちの学びの領域を学校外へと一気に広げていく。真の学びが生きた経験であることを、子どもたちは理解する。これがSDGs4「包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し」への本質的なアプローチとなる。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="459 1541 560 1877">教員</td> <td data-bbox="560 1541 1465 1877"> <p>1年生、2年生の子どもたちを、想像力豊かに物語とイメージの世界で育んできた教員は、3年生の大地に足をつけた「暮らしと仕事」を通じて自らも大きく成長させる。学習課題も教授法も大きく変化する節目にあって、教員自身が自分を成長させる機会を得ることができる、優れたカリキュラムである。子どもたちとともに、学びとともに成長し、変容する教員像こそ、持続可能な社会を生み出す教育の核心と言えるだろう。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="459 1877 560 2105">生徒</td> <td data-bbox="560 1877 1465 2105"> <p>3・4年生という発達段階の節目にあって、その変化を健やかに迎え入れられるような手助けを、学習活動から得られることは幸せである。上記のとおり、1・2年生で培われた想像力を、実社会の生活に力強く活かせるように導くことで、複雑な社会課題にしなやかに取り組める能力を育成するのである。</p> </td> </tr> </table>		学校	<p>圧倒的な時間数を校外学習に費やす「暮らしと仕事」のカリキュラムが、子どもたちの学びの領域を学校外へと一気に広げていく。真の学びが生きた経験であることを、子どもたちは理解する。これがSDGs4「包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し」への本質的なアプローチとなる。</p>	教員	<p>1年生、2年生の子どもたちを、想像力豊かに物語とイメージの世界で育んできた教員は、3年生の大地に足をつけた「暮らしと仕事」を通じて自らも大きく成長させる。学習課題も教授法も大きく変化する節目にあって、教員自身が自分を成長させる機会を得ることができる、優れたカリキュラムである。子どもたちとともに、学びとともに成長し、変容する教員像こそ、持続可能な社会を生み出す教育の核心と言えるだろう。</p>	生徒	<p>3・4年生という発達段階の節目にあって、その変化を健やかに迎え入れられるような手助けを、学習活動から得られることは幸せである。上記のとおり、1・2年生で培われた想像力を、実社会の生活に力強く活かせるように導くことで、複雑な社会課題にしなやかに取り組める能力を育成するのである。</p>
学校	<p>圧倒的な時間数を校外学習に費やす「暮らしと仕事」のカリキュラムが、子どもたちの学びの領域を学校外へと一気に広げていく。真の学びが生きた経験であることを、子どもたちは理解する。これがSDGs4「包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し」への本質的なアプローチとなる。</p>							
教員	<p>1年生、2年生の子どもたちを、想像力豊かに物語とイメージの世界で育んできた教員は、3年生の大地に足をつけた「暮らしと仕事」を通じて自らも大きく成長させる。学習課題も教授法も大きく変化する節目にあって、教員自身が自分を成長させる機会を得ることができる、優れたカリキュラムである。子どもたちとともに、学びとともに成長し、変容する教員像こそ、持続可能な社会を生み出す教育の核心と言えるだろう。</p>							
生徒	<p>3・4年生という発達段階の節目にあって、その変化を健やかに迎え入れられるような手助けを、学習活動から得られることは幸せである。上記のとおり、1・2年生で培われた想像力を、実社会の生活に力強く活かせるように導くことで、複雑な社会課題にしなやかに取り組める能力を育成するのである。</p>							

